

これまでは雪で折れてしまった枝はそのままにしておいて、雪が解けてから気が向いたら拾って集めて焚き付けにしていた。それで問題にならない量だったのだが、昨年の大雪でかなり太い枝も裂けるように折れてしまい、量も相当になつてしまった。これを雪解けを待つてから運んで集めるのは枯れ草に枝が絡んだり、雪解け水でぬかるんだ土に足を取られて大変になる。やるとしたらまだ雪のあるうちにするのが良いのだ。

雪の上を歩くのにはスノーシューを使う。ここに移り住むきつかけを作つてくれた隣人から、竹山移住記念にプレゼントしてくれたスノーシューであるが、これまで冬の野山の散歩の道具と思ひ込んで出番があまりなかったのだが、この時を待つていたように冬の外作業に必須の道具だということを再認識させてくれた。歩き慣れないと雪に先端を取られたりして不自由なのだが、慣れてくると補助ストックなしで移動できるようになつてきた。両手が自由になると折れてしまった枝を鋸で切ることできるし、両手に抱えて運ぶこともできる。行動範囲も広くなつた。普段は根曲がり竹が行く手を阻んでいたところも雪の上だと自由に行き来できる。これまで行つたことのなかつた敷地の端まで行けるのはこの時期がベストだ。

雪の重みで折れた枝は、太いのは二十センチメートルほどもあり、大小集めてくるとちよつとしたポリウムになつてしまった。とりあえず、家の近くに積み上げたのだが、雪解けになるとそこは、川であつたりレイズドベットの畑だつたりするのでそのまま放置するわけにはいかない。まずは用途別に分類するところからだ。太い枝は薪にする。比較的長さのある小枝は束ねて土留めなどに使える「粗朶(そだ)」にする。それ以外の小枝は細かく砕いて園路に敷く材料にする。この分類作業は結構時間がかかるのだが、これをしておかないと最後の作業が終わるまで雑然とした状態のままになつてしまう。外作業は結構何日もかかるものが多いのだが、その一日一日で一定の始末がつくように作業をして行くのが重要だと思つている。

ようやく枝の整理が終わつたのは、久しぶりの土が雪の下から出て来るころになつた。そうなつたら、薪にするとして集めておいた枝をさらに、チェーンソーで切るもの、鋸で切るもの、鉋で切るものに分けて、それぞれの作業をしていかなければならない。それも目処がつく頃には別の作業が待つている。フキノトウなどの山菜の収穫だ。フキノトウにしる根曲がり竹の小さなタケノコにしても、ちよつと目を離すと大きくなりすぎてしまう。敷地のあちこち目星をつけているところを毎朝巡回するのだ。

敷地の中の雪は最後ひとつの小さな塊になつてやがて完全に消える。それはだいたい四月の上、中旬になる。ここで暮らし始めてからの完全雪解けの日で一番早かつたのが四月七日だ。そして一番遅かつたのが四月の十九日。大雪だつた今年だ。それに合わせるように自動車の冬用タイヤを夏用に変えるタイヤ交換がやってくる。

